

(別紙 2)

論文審査の結果の要旨

氏名 村上 謙

本論文は、近世後期（18世紀後半から幕末まで）の上方の言葉、とくに口語を取り上げて、そこに見られる語形変化がどのように発生し、展開したかを跡付けることにより、従来の研究では十分に解明されていなかった言語事象を明らかにすることを目的としている。本論文は大きく2部に分かれる。第1部は3章からなり、第1章では後期上方後の展開を4期に分けて概観し、第2章では近世後期の上方において遊里の言語（遊里語）が大きな影響力を持ち、広く一般の社会に新たな表現を供給していたとしてその性格を論じている。第3章では後期上方語の資料について述べ、本論文に用いた言語資料の全体像を示す。第2部は9章からなる。第4章では近世後期上方語に見られる母音や子音の交差、脱落等の現象を取り上げて論じ、第5章では形容詞ウ音便の変化形「ヤカマシナル」等の形が「ヤカマシユナル」のような形から発生し、後に「ヤカマシーナル」のような形を発生させたことを述べる。第6章では「寒く」のウ音便「さむう（なる）」が「さむ（なる）」のように短呼される現象を取り上げ、下接する語に制限のあったことを論ずる。第7章では後期上方語資料における仮名表記の傾向について論じ、前期の傾向が保持される場合と前期とは異なる傾向が新たに発生する場合とがあることを主張する。第8章では「動詞連用形+や」（「はよ行きや」等）を取り上げ、「動詞連用形+やれ（助動詞「やる」）から発生したとする従来の説を認めながらも、天明年間（1780年代）から新たに「動詞連用形命令法+や」が発生し、これが主流を占めるようになったとし、第9章では動詞連用形が命令法に用いられる現象を取り上げて、これが宝暦年間（1750年代）に一般化した一段動詞の命令形「ーイ」の形から影響を受けて発生したものと論じた。第10章では「動詞連用形+な」が禁止を表すもの（連用形禁止法）を取り上げ、これが宝暦以降の上方遊里に起こったとする。第11章では「動詞連用形+んか」（「飲みんか」等）が勧誘・命令を表す場合を取り上げ、この成立過程を考察し、第12章では中世末に発生した尊敬の補助動詞「ナサル」について、上接する語に制限のあったものが、近世後期の上方語においてはその制限が緩和され、広く和語、漢語が上接するようになったことを述べる。本論文は、洒落本、噺本、浄瑠璃本等の言語資料から丹念に収集された用例に基づいて後期上方語で起こった語形変化の諸相を論じており、さらなる論証が望まれる点もないわけではないが、現代近畿方言の母胎でありながら従来十分な研究が行われて来なかった近世後期上方語の研究の進展に大きく寄与する独創性の高い論考であると評価される。

よって、本審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに値するとの結論に達した。